

I 論文

「フロイトへの回帰」の前夜 1950 年における精神分析の進展とラカン

非常勤相談員 河 野 一 紀

1. はじめに

1950 年 9 月 18 日から 27 日にかけてパリで、大会長ジャン・ドレー Jean Delay、事務局長アンリ・エー Henri Ey のもと、第一回世界精神医学大会が開催された¹。その第 5 部門「心理療法-精神分析、心身医学」の総会は、「精神分析の進展と現在の傾向」というテーマで、9 月 26 日にソルボンヌ大講堂で行われた。

大会に先立ち、企画責任者であるシカゴのフランツ・アレクサンダー Franz Alexander (1891-1964) をはじめ、ロンドンのアナ・フロイト Anna Freud (1895-1982)、米国シンシナティのモーリス・レヴィン Maurice Levine (1902-1971)、ニューヨークのレーモン・ド＝ソシュール Raymond de Saussure (1894-1971) による基調報告が発表されていた²。総会では、アレクサンダーによる開会の辞の後、4 人の報告者から各報告の要約が提示された³。続いて、基調報告をめぐって各国の精神分析協会や精神医学会で行われた議論の概要について、モーリス・ベナシー Bénassy, M. (1904-1985) による報告が共有された⁴。そして、マリー・ボナパルト、メラニー・クライン、ルネ・ラフォールグ、シャルル・オディエ、ダニエル・ラガシュ、そしてジャック・ラカンらが報告に対するコメントを行い、討議が交わされた。

当日のラカンのコメントは『他のエクリ』に収録されており、現在では容易に参照可能である⁵。しかしながら、そのテキストを読むだけでは、当時の文脈における発言の射程を十分に理解することは困難である。というのも、同書には、ラカンの批判が向けられていたアレクサンダーやソシュールの報告テキストが収め

られていないからである。そこで本稿では、第一回世界精神医学大会の資料をもとに当日の議論を再構成することで、1950 年という時期——前年の 1949 年にはクロード・レヴィ＝ストロースと知り合い、その仕事に急速に傾倒していくと同時に、第 16 回精神分析国際大会において鏡像段階論を再び世に問い、そして翌年の 1951 年にはフロイトの症例を検討するセミナーを開始した、「フロイトへの回帰」の前夜に当たる時期——に、ラカンがいかなる理論的立場を取り、精神分析の新潮流と対峙していたかを明らかにしていく。

2. 当時の精神分析の状況

アレクサンダーは報告に先立つ開会の辞で、レヴィンを除く 3 名の報告者は精神分析の展開をそれぞれ異なる観点から検討しているが、ひとつの理論的方針、すなわち神経症を「自我の機能が、本能的要求相互の、およびそれらと環境との調整という責務を果たすことに失敗している状態」⁶とみなす立場を共有していると指摘する。ここから、「精神分析の進展と現在の傾向」という総会のテーマは、アメリカにおける自我心理学の展開を念頭に発案されたことが推察される。このことは実際、先の指摘に続くアレクサンダーの主張によっても裏付けられている。それによれば、治療における進展とは、自我がその統合機能をより十分に実行できるようにすることにあり、そのためには、この機能の損傷を引き起こした幼少期の環境からの影響を修正する必要があるという。

児童分析においては、こうした問題は直接的に取り扱うことが可能である。一方、成人の分析では、転

移のなかで病因となった家族状況を再現し、その状況を「正しい取り扱い」⁷を通じて、葛藤に対して新たに対処する機会をつくりだすことが目指される。以上を踏まえ、アレクサンダーは、転移状況の「正しい取り扱い」とは具体的に何なのかという問いこそが議論の主題であると述べる。そして、精神分析の技法をより良いものとするためには、確立された技法をそのまま保存し伝達していくだけでなく、理論と技法を再検討することを通じて知を進歩させることが必要であると強調している。

2-1. アレクサンダーの報告

アレクサンダーは「精神分析の進展と今日的傾向」⁸と題した報告を始めるにあたり、精神分析の進展が人格についての理解の進歩と密接に関連していると指摘し、その進展を三段階に区分している。

精神分析はまず「力動的無意識の発見」から始まった。フロイト以前の心理学は、常識に照らして理解可能な心的現象をもっぱら扱っており、常識では説明できない非合理的な心的現象は脳生理学的変化に起因すると考えられていたとされる。これに対してフロイトは、あらゆる心的現象は、正常か病的かを問わず、心理的動機から説明可能であるとする考えを打ち出した。そして、夢や症状、失錯行為には意識的動機を認めることはできないが、無意識的動機を理解を通じてその意味を把握することが可能であると主張し、人格を意識だけでなく無意識を含む不均質なシステムとみなしたのであった。さらにアレクサンダーは、無意識の心的過程は原始的の性質を持ち、前言語的段階へと位置づけられるとしたうえで、前言語的かつ願望充足的な思考を現実に適応した心的過程へと置き換えていくプロセスとして心的成熟を定義している。

続いて、精神分析の進展は、自由連想法や夢解釈、さらには症状の象徴的解釈といった「無意識のプロセスの研究に適した方法の展開」というかたちで生じた。これらの方法によって、抑圧や置換、投影、合理化、昇華などの基本的な心的機制、さらには前言語的な感情表現や思考の様式が明らかにされた

という。アレクサンダーによれば、精神分析の方法はあらゆる科学と同様に、我々が普段用いている観察と推論の延長線上にあり、「精神分析は、それ以前の心理学的方法とは異なり、他人の動機や行動を理解するために用いられている常識的な方法をただ改良したに過ぎない」⁹。そして、いわゆる「常識心理学」に無意識の心的過程を読解するための修正を加え、他者理解の方法を改良することを通じて、精神分析は原始的で前言語的な象徴的表現を、常識心理学で扱われる言語化された思考へと「翻訳」¹⁰する方法を手に入れたとの見方が提示される¹¹。

第三の段階への進展は、フロイトが『自我とエス』(1923)において、エス・自我・超自我の区分に基づいた構造論を提示したことによって始まり、抑圧された心的内容の解明というそれ以前の関心に代えて、「自我の諸機能の研究」が中心に据えられるようになった。アレクサンダーは、この進展において最も重要な点は、心的機能が有機体全体との関係において構想されたことにあると指摘する。こうして、自我の機能とは組織化された合理的な行動を実行し、有機体内の恒常性を維持する機能、つまり興奮の水準を一定に保つホメオスタシスの機能に等しいと考えられるようになった。さらに、この機能を実行するために、自我にはその内部と外部を知覚する力、随意的行動を制御する力、そして何よりも本能的衝動を内的・外的要請へと適応させ、それらを統合する力が備わっているとされた。自我は経験を通じて、衝動の即時的満足を求める傾向、すなわち快原理に抗して、満足を先延ばしにし、衝動を環境へと適応させる方法を身に付けるなかで、現実原理に従って作動するようになる。自我が内的・外的要請と調和させることのできない本能的衝動に脅かされる場合、葛藤や不安が生じるが、自我は様々な防衛機制によってそれらに対処する。こうした視点からは、精神病理はもっぱら自我の統合機能の失敗、および防衛機制の破綻の結果として理解される。

自我の諸機能の研究の展開は、精神分析の治療目標と技法にも変化をもたらさずにはおかない。治療の重心は、抑圧された無意識の素材の理解か

ら、自我の防衛機制の取り扱いへと移っていった。治療の目的もまた、自我が抑圧されたものを統合できるようにするために、自我の防衛機制を変容させ、統合の能力を高めることへと変化した。この点についてアレクサンダーは、「自我の機能は洞察を通じた統御である」¹²と定義しており、その実現には転移と抵抗の取り扱いが最重要の課題であると考えた。そうした治療の方針のなかに、アレクサンダーは修正情動体験 *corrective emotional experience* という自身の概念を位置づける。これは、幼児期に経験した環境の病理的影響を中和するような分析家の態度のもとで、未解決の葛藤に再び取り組む体験を指している。そうした作業を通じて、不安を生じさせるような超自我、すなわち内在化された親のイメージの影響下から脱し、心的成熟に相応しい自律的判断を身に付けることで不安は解消される。同時に、防衛機制の在り方も変容し、その結果として自我の統合能力が回復、さらには強化され、ある種の自己統治が確立される¹³。

しかしながら、修正情動体験に対しては、分析家への患者の依存的関係を前提とするために、治癒が先延ばしにされるという問題が当時から指摘されていた。この点に対する技法上の修正として、アレクサンダーは、治療の連続性を維持しつつ、セッションの頻度を最小限に減らす、短期間あるいは長期間の中断を適切なタイミングで設けるといった提案をしている。また、自立への動機づけを高めるために、患者に対して治療外での新たな人生経験を奨励するという方法も採用された。つまり、分析家はもっぱら中立性を維持しながら解釈を行うだけではなく、自立/自律を獲得するための行動へと患者を積極的に促すことが推奨されたのだが、これは精神分析の従来の方法からの逸脱とも捉えられかねないものであった。しかし、アレクサンダーは、「フレッシュで、ドグマ的でない、実験的な精神の覚醒」こそが今日の精神分析の進展を支えていると強調し、それはフロイトが遺した精神分析をそのまま保存されるべき「固定的で活気のない体系」¹⁴とみなす態度を捨て去ることに他ならないと主張している。

2-2. アナ・フロイトの報告

アナ・フロイトの報告、「精神分析的児童心理学の進展の意義」¹⁵では、過去 25 年間に精神分析的児童心理学に導入された理論的修正と発展についての検討がなされている。これらを支えるデータは、成人の神経症者・精神病患者の分析、非神経症者と神経症者の夢分析、神経症児の分析における観察、さらに分析を体験した保護者および分析を体験した教育や特殊教育の専門家による子どもの観察など、多様な領域から収集されたものであった。

幼児期についての理論は、精神分析において中心的位置を占めており、その更新は成人の精神障害の理解や治療技法に直接的な影響を及ぼさずにはおかない。また、リビードや対象関係の発達を含むがゆえに、その理論は教育、犯罪学、社会学などの関連分野にも応用可能であり、場合によってはその基盤にもなりうるとアナ・フロイトは主張する。

このような射程を持つ幼児期の理論の進展を検討するにあたり、アナは父ジークムントによって 1920 年から 1926 年にかけてなされた三つの重要な理論的修正を取り上げる¹⁶。第一の修正は、「快原理の彼岸」(1920)における攻撃性の再定義である。ここにおいて、攻撃性は環境要因への反応ではなく、生得的な破壊衝動の表出として位置づけ直された。そして、人間の本能的衝動は生の本能と死の本能の二元論というかたちで理解され、幼児が最初の対象と結びつく関係は、愛憎が入り混じったものであると考えられた。さらに、死の本能という概念は早期の反社会的反応や自傷傾向の説明をも可能にしたのであったが、このような文脈においてアナは論敵であるメラニー・クラインの理論に言及している。

第二には、「制止、症状、不安」(1926)での不安概念の再定式化が挙げられる。これによって、抑圧されたリビードが不安に転じるという当初の仮説は放棄され、自我こそが不安の源泉であり、不安は自我が内的・外的危険に脅かされた際に生じるシグナルとみなされるようになった。ここで問題となる危険とは、自我の統合機能を脅かすものであり、①本能的衝動そのものの強さ、②本能的衝動と外的環境との葛

藤、③本能的衝動と超自我との葛藤に大別される。そして、不安は危険に対する自我の正常な反応である限りにおいて、不安を完全に除去したり、そもそも生じないようにすることは不可能であり、治療や教育の目標はむしろ、自我の不安に対処する能力を向上させることにあると考えられるようになった。

第三には、防衛概念の再評価である。アナ・フロイトによれば、防衛は自我が葛藤や不安に対処するためのあらゆる手管を指す。この理論的修正によって、各々の防衛機制が心的装置の組織化のどの段階と結びついているかということに関心が向けられるようになった。ここでもまた、投影 *projection* や取り入れ *introjection* といった最初期の防衛機制の病理的側面を明らかにするものとして、クラインの仕事にアナは言及している。防衛概念の再評価はまた、心的発達の正常・異常を論じる際に、単にリビードの量的問題だけでなく、防衛機制の構造という質的側面への関心を促すものであった。こうして、発達段階に応じた適切な防衛機制の使用という視点が新たに重要なものとして位置づけられた。

以上を踏まえ、アナ・フロイトは幼児期における本能充足に関する障害を外的要因と内的要因から整理している。外的要因には、①愛の対象の不在や離別、拒絶による満足の機会の欠如、②食事制限や厳格なトイレトレーニングなどによる満足の制限、③エディプス状況に代表される、制止をもたらす存在による満足の不可能性、④超自我による禁止が含まれる。他方で、内的要因としては、①愛憎や生死の水準での本能的衝動の衝突¹⁷、②能動・受動、男性・女性、サディズム・マゾヒズムの水準でのリビード間の衝突、③自我に統合されない衝動間の葛藤、④正常な成熟過程における自我とエスの葛藤が挙げられている。

興味深いのは、報告の最後にアナ・フロイトが、こうした理論的知見を「実験」¹⁸によって検証し、反証へと開いていく必要性を説いている点である。ここでの「実験」とは、実験室のような管理された状況での実験ではなく、「運命によって供される強いられた偶発的な実験」とされる。そうした状況では、通常は複

合して作用する諸要因のうち、特定の因子の影響を単離して観察することが可能であるという。具体的には、早期に家族から引き離され、両親を知らずに育った強制収容所の子どもたちの状況や、乳幼児期を家族以外の集団のなかで過ごした子どもたちの状況をアナは挙げており、前者では子どもと母親のリビードの関係という要因が、後者ではエディプス状況という要因が除外されているという。こうした主張には、当時の時代背景だけでなく、観察や実験を重視するアナ・フロイトの実証的姿勢が見て取れる。

2-3. レヴィンの報告

「アメリカにおける精神分析の動向」¹⁹においてレヴィンは、過去 20 年間ににおけるアメリカの精神分析の発展について調査し、25 名の精神分析家からの書面回答に基づいた結果を提示し、さらに自身の見解を踏まえた評価を行っている。

まず、精神分析家を対象とした調査からは、アメリカにおける精神分析の発展について以下のような傾向が指摘された。①心身医学の発展への影響、②人類学、社会学、臨床心理学などの他分野との学際的交流、③医学界における受容、④精神医学との統合、⑤より短期で柔軟な治療の試みとそれに伴う技法の修正、⑥精神病の治療への関心の高さ、⑦精神分析インスティテュートの数や規模の拡大、⑧一般大衆による受容、⑨ソーシャルワーカーによる精神分析の知見の応用、⑩軍隊での採用、⑪精神分析の原理の希釈、短絡、皮相的理解、折衷主義、⑫ヨーロッパからの分析家の流入。さらに、少数意見としては、①地域保健プログラムへの精神分析家の参加、②公衆衛生局や退役軍人庁の顧問職への精神分析家の採用、③集団精神療法の発展への影響、④ユングやアドラーなど精神分析から派生した学派の影響力の低さなどが挙げたという。

以上の結果を踏まえつつ、レヴィンはアメリカ精神分析の発展における 3 つの主要な特徴について自らの考えを提示している。第一の特徴は、精神分析が「アメリカにおける精神医学の発展全体の根幹と推進を担う精神」²⁰となったという点である。今日で

はもはや考えられないことだが、当時のアメリカ精神医学においては、指導的立場にある人物の多くは精神分析家であるか、精神分析的アプローチを修得した者であったという。このため、精神分析は精神医学にとってもはや「外部の学問領域」ではなく、精神医学へと広く統合された領域として位置づけられていたと指摘されている。

もっとも、このような傾向に対しては、先の調査結果にも見られたように、精神分析の希釈化への懸念が提起されてもいた。これに対してレヴィンは、そうした危険を認めつつも、自身の学んでいるものが精神分析的アプローチ全体のごく一部に過ぎず、精神分析家と同じように振る舞うことは危険であることを医学生に十分に理解させるかたちで教育が行われる限り、希釈化は起こらないという考えを示している²¹。すなわち、医学生は症例を通じて不安や疑念を喚起するような概念（エディプスコンプレクス、去勢不安、同性愛衝動など）にいくらか触れるが、実践においては、不安を喚起する葛藤の表面化を避けるため解釈を行うことを禁止し、指導医とともに自身の不安や転移・逆転移を精査するなどの制限・管理によって希釈化は回避されるという²²。

第二の特徴は、精神分析が患者の理解と治療に関して、医学的アプローチ全般の基礎的枠組みとなった点である。これは精神分析の諸概念が精神医学へと統合されたことで、精神医学が力動論的傾向を強めたことの帰結として理解される。また、こうした特徴は、研究と治療の両面で精神分析に依拠していた心身医学の顕著な発展によっても裏付けられている。

先に言及した分析家への調査では、心身二元論を乗り越え、有機的かつ統合的なアプローチを確立しようとする試みが、精神分析に基づく研究によって初めて実を結んだことが指摘されていた。実際、アレクサンダーの指導のもとでシカゴ・インスティテュートのグループが行った消化管障害（胃腸障害）の研究は、特定の葛藤状況と生理的反応との相関関係を明らかにし、その成果をもとに動脈性高血圧、喘息、片頭痛、狭心症、冠動脈疾患、さらには月経周

期へと研究対象を拡大していった²³。これらの研究において、内臓器官の障害、当時の用語で臓器神経症 *visceral neurosis* と呼ばれたものは、転換という機制によって生じるヒステリーの身体症状とは異なり、ほとんどの場合において心理的意味を持たないと考えられた。例えば、胃潰瘍は自己破壊や内向した攻撃といった象徴的解釈によってではなく、むしろ慢性的な胃運動の過剰亢進や胃酸の過剰分泌といった一連の生理現象の帰結として説明された。つまり、これらの症状は、慢性的な感情的衝動や葛藤によって誘発される生理的随伴現象として理解されたのであった²⁴。

第三の特徴は、アレクサンダーの報告においても言及されていた、精神分析技法の実験的修正の試みである。「治療への情熱」に基づく「より短期間でのより柔軟なアプローチ」²⁵の提案は、心身症患者の治療において、口唇の依存性の問題が高い頻度と程度で認められたこと、さらに従来の分析技法がこの依存傾向を助長する危険があると考えられたことに由来している。

レヴィンは、精神分析技法の発展を主題の変遷に基づいて三つの段階に区分している²⁶。すなわち、第一段階はセクシュアリティを主に扱っていた時期、第二段階は敵意が主題となった時期、そして第三段階は依存性が中心となった時期である。レヴィンによれば、依存性の問題は分析を終わりのないものにする抵抗を生じさせる可能性を有しており、この課題に対処するために、従来の技法に対する修正が実験的に試みられたという。さらに、こうした試みの背景には臨床的経験だけでなく、「アメリカ文化とその特質」²⁷も関与しているとの指摘がなされていた。すなわち、アメリカにおいてはヨーロッパに比して²⁸、多様なアプローチに対する寛容性が高く、また個々の研究者の独立性がより尊重されるという文化的環境が、技法上の革新を促す要因として作用したと考えられたのであった。

レヴィン自身は、精神分析技法の実験的修正の試みに対して賛否が併存していることを認めつつも、その試みには「正当な理由」が存在し、「受容と寛容

さ」²⁹をもって評価されるべきであるとの立場を示している。総じて彼は、アメリカにおける精神分析技法の展開を肯定的に捉えており、その実験的精神を精神分析の新たな可能性を切り拓く契機として位置づけている。

2-4. ソシユールの報告

ソシユールは他の報告者とは異なり、自身の症例を素材としつつ「精神分析における今日の傾向」³⁰について論じている。その議論は、彼が「フロイトの死以降、最も重要な出来事」³¹と評するシャルル・オディエの 1948 年の著作、『不安と呪術的思考』³²に大きく依拠している。オディエは同書において、フロイト理論とピアジェの発達理論との統合を企図し、精神分析における自我概念をピアジェの認知発達理論に基づいて再構築する試みを展開している。ソシユール自身は報告のなかで、ピアジェの仕事を参照する意義として、それが子どもの直接観察を通じて思考の発達過程を明らかにした点を強調している。そして、直接観察という手法を、成人の神経症者における退行の観察をもとに自我や人格の諸段階を論じてきた従来の精神分析の方法と対置している³³。

ここで、ソシユールが報告の素材とした症例³⁴の概要を確認しておこう。患者はピーター（仏語版ではピエール）という名の 36 歳の男性である。分析の経過のなかで、分析家であるソシユールが数週間の休暇を取ることを告げた後、ピーターは自身も旅行を計画し始めた。ところが同時に、彼は強い不安状態に陥り、夜眠ることができなくなり、激しい咳と喀痰を伴う結核様の症状を呈するようになった。ピーターは自分が結核に罹患しており、死に至るだろうという考えに圧倒されたが、X 線検査と喀痰検査の結果は陰性であった。

こうしたなかで、ピーターは 13 歳当時の体験を想起したという。彼の家族背景について先に述べておくと、彼は 7 歳時に父を結核で亡くしており、母は 8 人の子ども全員に十分な教育を与えねばならないという責務に駆られ、子どもたちを休みなく勉学に励ませた。さらに母は、極めて厳格な道徳観の持ち主

であり、息子たちに対して余暇、女性との交際、ワイン、ダンス、タバコなどの娯楽は神に罰せられる罪として禁止していた。そして、そうした快楽に耽るならば、父のように結核で死ぬことになるかと繰り返し教え込んでいた。

ピーターが 13 歳の時、12 歳年長の長兄ジャンは 10 日間の休暇をバミューダ諸島で過ごす計画を立てた。ジャンはそれまで真面目に働き、自分の家族を養いながら、母やきょうだいを経済的に支援していた。しかし、彼の計画を耳にした母は、ジャンが自分の快楽しか考えていないと叱責し、休暇の計画に激しく反対した。だが、ジャンは考えを変えず、予定通り休暇に出かける。ところが、出発から 5 日後に咳が出始め、結核と診断され、ジャンは担架で実家に搬送されてしまった。母は子どもたちを呼び集めて、ジャンは時間を無駄にしたため、神が罰として彼を結核にしたのであり、明日には父のように喀血で死ぬだろう、と言い放った。さらに、ピーターに対しても、独立するために金を稼ぐことしか考えていないと非難し、ジャンの苦しむ姿を戒めとすべきと断じ、今夜は彼と同じ部屋で寝よう命じた。

こうしてピーターは、兄と 2 人きりでかつて父が死んだ屋根裏部屋に入れられた。兄を深く慕っていたピーターは恐怖の一夜を過ごし、兄を助けてくださいと跪いて神に祈った。そして、もし兄が助かったならば、決して女性には触れず、酒もたばこも吞まず、家族を支えるために働くことと約束したのであった。結局、ジャンは一命をとりとめ、ピーターは母の「お利口な息子」となり、母の言葉を絶対的に正しいものとして信じるようになった。しかし、その夜の体験はその後、彼の記憶から完全に切り離されてしまった。

ピーターは、生涯を通じて様々な状況下で結核様の症状に悩まされてきたが、それらが 13 歳時のあの夜の記憶と結びつけられることは決してなかったという。ソシユールは休暇をめぐって生じたピーターの不安を、過去の感情が幻覚として繰り返し現在の状況へと投影されたものと理解し、それを「幻覚性の感情 hallucinated emotion」³⁵と名付け、記憶のネットワークに統合された「同化された感情 assimilated

emotion」と対比した³⁶。ソーシャルによれば、ピーターが体験したであろう不安のように、あまりに強烈な感情は、高次中枢を一時的に麻痺させるため、言語的表象の水準——経験を分類し、記憶の想起と情動の放散の経路を確保するネットワークの水準——ではなく、前言語的イメージの水準で心的装置に書き込まれるという。このような感情は、有機体に吸収されない異物のごとく嚢胞化して、心的装置の内部で慢性的な刺激として作用する。しかし、自我はこの刺激を通常の処理経路によって対処することができないため、それが再活性化される状況において、感情は外部へと投影され、幻覚として再体験される。

ソーシャルは、幻覚性の感情を前論理的思考という思考形式の段階に位置づけている。前論理的思考とは、人類学者リュシアン・レヴィ＝ブリュル(1857-1939)が、いわゆる未開人に特有の思考様式として指摘した心性であり、その原理は融即律 *principe de participation* というかたちで定式化された。融即律とは、「A は B かつ非 B であることはできない」という矛盾律に反して、「A は B かつ非 B である」という事態を可能ならしめる原理であり、西洋的な論理的思考とは異なる思考様式とされた。

レヴィ＝ブリュルの影響を受けたピアジェは、未開人の思考と西欧社会の子どもの思考のあいだに自閉的思考や自己中心性といった共通の特質を見出し、前論理的心性という概念を自身の研究に早くから組み込んでいた。もともと、レヴィ＝ブリュル自身は、未開人の思考について論じる際、西欧社会の子どもと未開人を直接比較することではなく、むしろそのような比較に対しては明確に異議を唱えていた³⁷。

ピアジェは、成人の論理的思考に対して、子どもの思考を実念論 *réalisme* というかたちで定義した。実念論とは、子どもが心的出来事と物理的出来事を区別せず、両者を混同する傾向を指し、①内界と外界、象徴と現実の区別が存在しない非二元論、②思考と現実の混同に由来する自我中心性、③論理的関係でなく知覚印象や感情経験に基づく理解、という特徴によって表される。例えば、ピアジェは道徳性に関して実念論を提示している。これは物事や

行為を動機ではなく結果から、もっぱら善悪という基準によって判断する子どもの傾向を指す。このような他律的道德観は、絶対的真理の体现者としての両親に対して子どもが向ける敬意に由来するとみなされた。ピアジェの実念論を継承しつつ、オディエは子どもが自らの感情を投影によって外在化する傾向を情動の実念論として定式化し、外在化された感情は幻覚と同様、主観からは独立した実在として影響力を行使すると考えた。そして、このような思考の在り方は、成人の論理的・反省的思考とは対照的に、前論理的で呪術的性格を持つとされた。

かくして、前言語的な幻覚性の思考と論理的な同化された思考という二分法が、フロイトが提唱したエス・自我・超自我の構造に代わる精神病理学の基本的枠組みとして提案されるに至る³⁸。ソーシャルの考えでは、フロイト自身は明言していないが、『自我とエス』での有名な図式を参照すれば、抑圧された欲動を自我とエスの中間領域、すなわち自我の無意識的かつ前言語的部分に位置づけていることが理解されるという。そして、「アルカイックな自我」³⁹によって構造化された抑圧された欲動の領域こそが、「島状に存在する幻覚性の思考」⁴⁰から構成される病理的な超自我に相当するという。このように、ソーシャルの読解においては、フロイトの無意識は前言語的かつ前論理的な次元へと還元され、無意識はある種の神秘化を被ることになる。

ソーシャルはピーターの治療において、転移を通じて幻覚性の感情を再活性化し、それを同化へと導くことを試みたと述べている。分析家への転移は母への依存関係を再演するものであり、ピーターはソーシャルに対して道徳的助言や行動規範を求めたという。また、分析の過程で患者はしばしば休暇を取りたいという願望を語ったが、その度に自分が経営する工場や自分の健康状態に災厄が降りかかるという考えが浮かんだ。こうした不安から自らを防衛するために、ピーターはその願望を分析家へと投影し、分析家が自分に休暇を取ることを勧めて、自分を不安に陥らせたと激しく非難したという。

ソーシャルの考えでは、治療のなかで感情が幻覚

というかたちで現れた場合、分析家はそれを直ちに解釈するのではなく、むしろ感情がそれ自体として十分に展開するのを待たねばならない。ゆえに、分析家がそうした感情を投影として患者に説明したり、議論を交わしたりすることは不毛である⁴¹。むしろ投影というかたちでの感情の外在化は、患者がそれを自己のものと気づくために必要な準備段階であると同時に、分析に新たな素材をもたらす契機になりうる。実際、母との関係が転移において再演された後に、ピーターは分析家を弟のアルフレッドのようだと非難したという。この弟は、母の禁止にもかかわらず自分のやりたいことを自由にやり、それができない兄のピーターを馬鹿にしていたのであった。

では、こうしたプロセスのなかで、感情の同化はいかにして生じるのだろうか。ソシュールは、陽性転移の展開によって分析家に対する信頼が高まり、患者の罪責感が軽減されるなかで、次のような契機が生じると述べている。「患者が独力で、あるいは分析家の助けによって、自らの合理化が誤っており、単に過去の感情を分析状況に投影していただけだと気づくとき、彼は不意を突かれたような驚きを感じる」⁴²。この驚きを契機として、これまで混同されていた過去の状況と現在の状況は突如として区別され、幻覚性の感情の投影は止む。代わりに、当該の感情は特定の時間と場所において生じた過去の出来事と結びついたかたちで想起され、同化が達成されるという。こうして、患者はもはや前論理的な幻覚性の感情による支配から脱し、合理的な自我の働きに基づいて行動することができるようになる。ソシュールによれば、ピーターはこのような体験の後、妻と短い旅行を楽しむことができるようになったという⁴³。

ソシュールは、ピーターの症例を通して、「フロイトが我々に教えた技法の正当性を示すと同時に、治療に関係したメカニズムを実証すること」⁴⁴を試みたと述べているように、治療においては古典的な技法に従い、分析家が可能な限り中立性を保つことの重要性を強調している。他方で、アレクサンダーが提示する技法について、治療が表層的なものにとどまるなどの欠点を指摘しつつも、治療プロセスを段階

的に分けけて観察すること可能にするといった利点を認め、精神分析経験をより豊かなものとするために、こうした技法的修正を含むさらなる実験的作業が必要であると述べていた⁴⁵。

3. ラカンの発言

ラカンは基調報告に対するコメントのなかで、4名の報告者全員に言及しているが、主としてアレクサンダーとソシュールの報告を批判的に検討している。アナ・フロイトについては、クラインの技法の基盤にある「逸脱」に反対の立場を明確にしつつも、この総会において唯一クラインの仕事に触れた慧眼を称賛している⁴⁶。またコメントの最後にも、彼女がフロイトの精神の視野の広さを改めて想起させたことに対して謝意を表しているが、これらの言及はいずれも形式的な賛辞といった印象を受ける。ラカンはまた、レヴィンの報告に対しても、自分たちと同様にフロイトの精神が危機にあることを認識している分析家がアメリカにも存在することを伝えるものと評価しつつも、簡単な感謝を述べるにとどまっている⁴⁷。

3-1. ソシュールへの批判

ラカンはコメントの冒頭から、ソシュールが感情という概念を議論の中心に位置づけている点に異議を唱えている。ここで問題となるのは、転移というかたちで反復されるものが何であり、それをいかに取り扱うかということである。ラカンにとって、「感情」が反復されるという主張は、過去の「状況」⁴⁸が反復されるという従来の考えをいささかも更新するものではない。それどころか、ソシュールは感情を軸に議論を展開することによって、精神分析が取り扱うものを前言語的・前論理的な次元へと還元してしまう。これに対してラカンは、フロイトにおいて無意識は決して前言語的でも前論理的でもなく、むしろ言語を介してこそ把握されるという考えを明確に打ち出していく。

先に見たように、ソシュールはピーターが想起した13歳時の出来事について、自由連想を通じてその意味作用を探求することなしに、そこで体験されていたであろう感情にもっぱら注意を向けていた。そし

て、この感情はその強度ゆえに言語化を免れるかたちで前言語的なものとして心的装置に書き込まれ、適切な放散経路を欠くために、投影という前論理的なメカニズムを通して幻覚性の感情として繰り返し体験されると考えられた。対してラカン、このような立論はむしろ逆説的に、患者の想起が何を意味しているのかは、その想起をめぐる分析のなかで展開される自由連想を通じてのみ明らかになるということを示しているだけであると指摘する⁴⁹。

ラカンからすれば、ソシユールはピーターにとっての休暇の意味を問うことなしに、ただそれを主体が快へとアクセスする契機として理解するにとどまっている。しかし、このような理解は「あまりに因襲的」であり、その結果、ピーターの「強迫神経症的な来歴」⁵⁰が見過ごされているという。実際、ソシユールの報告には、強迫神経症者の臨床的特徴を示す記述が散見される。ピーターは絶えず職業上の懸念に圧倒され、経営する工場の細部にまで注意を張り巡らせずにはいられない。家庭では仕事を忘れて妻子に思いやりをもって接しようとするが、玄関を入るや否や仕事の悩みが頭を埋め尽くす。このように、患者は絶えず仕事をめぐる思考に支配されているのだが、このような強迫観念は彼を快から遠ざけると同時に、勤勉な男というその自己イメージを維持するようにも作用している。ここには、強迫神経症者に関してラカンが指摘した、自我の周囲に「堡壘的構築物」⁵¹をつくりあげる傾向が認められるだろう。

こうした視点に立つならば、ピーターにとって休暇とは、単なる快へのアクセスの機会ではなく、むしろ自らを快から遠ざけるための防壁が失われる事態として理解されよう。そうであるならば、休暇を享受したいという願望はいささかも問題ではない。仕事について絶えず考えることで、彼は自らを快から遠ざけているのであり、快の到来はピーターにとって、自我の危機に他ならない。

また、ソシユールは患者が 13 歳時の出来事を取り上げ、もっぱら母への依存関係を強調しているが、ピーターと父との関係にも注目しないわけにはいかない。父は彼が 7 歳の時に亡くなっており、その後

に母が子どもたちに向けて放った言葉は、父は快に耽溺したがゆえに神の罰を受け、結核で死んだと言わんばかりのものであった。この言葉は、もし快樂に耽るならば自分も父と同じように神から罰を受けて死ぬという考えをピーターに植え付けたであろう。実際、彼は休暇を取りたい、仕事をやめたい、不貞を働きたいといった衝動を抱くときに、父を死に追いやった結核様の症状に苦しめられていた⁵²。果たして、ピーターは父の死をどのように体験していたのだろうか。ラカンの見立ては、患者におけるエディプス葛藤、すなわち父の死に対する罪責感を示唆している。だが、ソシユールはそうした可能性には一切触れることなく議論を展開している。

このような議論の欠陥を、ラカンは以下のようなかたちで表現している。ソシユールは感情概念を出発点とする「論理的誤謬」を犯したために、ピアジェのカテゴリーに依拠した「時代遅れの病因論」へ、分析による吟味を欠いた「不確実な病歴」へ、そして最終的には「ユーモアの欠如」⁵³へと陥ってしまった、と。ここでの「ユーモアの欠如」という表現は、言い間違いや地口といった言語的現象を重視したフロイトの精神から遠く離れていつている状況を指摘しているものと考えられる。

ラカンはピアジェの心理学を「大人の理想的心理学」と呼び、主観・客観の区別や視点の相互性によって大人の心理学と子どもの心理学を切り離すという点で、それは「哲学者の心理学」⁵⁴と何ら変わらないと批判する。ここでの「哲学」とは、「精神分析の経験」が対立する「コギトから直接に由来するあらゆる哲学」⁵⁵を指すと考えられる。すなわち、ピアジェの心理学は自己意識や自我に立脚する哲学の延長に位置するがゆえに、精神分析とは峻別されねばならないのである。

大人と子どもの心理学、あるいは思考の差異に関して、ラカンはレヴィ＝ストロースの『親族の基本構造』⁵⁶に収められた「アルカイックをめぐる錯覚」というテキストを参照している。レヴィ＝ストロースは大人と子どもの思考の差異を、ピアジェが言うような成熟による「構造」の変化ではなく、その「広がり」によって

区別する。つまり、幼児の思考は「一種の普遍的基層」をなし、大人の思考はその基層から「集団の要請に応じた選択と除外」⁵⁷を経て形成されていくと考えたのである。こうした見方は、思考の発達をその広がりや段階的に獲得されていくプロセスとみなし、大人の思考にその「完成」を見出す「常識的」発想に対して根本的に異なる立場を示している。これはまた、フロイトが子どものセクシュアリティから性理論一般を打ち立てた態度にも通じるものであり、レヴィ＝ストロースは実際、フロイトの「多形倒錯 la perversion polymorphe」をもじった「多形的社会存在 le social polymorphe」という表現によって、子どもの思考が秘めている可能性や潜在的な力を強調していた。

ラカンによれば、フロイトの方法は、人間についての知識を転覆させるにとどまらず、子どもについての知識を真に切り拓く、「常識によっては考えられない発見」をもたらした。フロイトの方法は、大人と子どもの思考の差異に着目するのではなく⁵⁸、両者のあいだの言語とパロールの使用に関する「類似」を出発点としている。この「類似」とは、「子どもは大人が使用する言語を話しながら、言語習得の初めから驚くべき正確さで構文形態を用いている」⁵⁹という事実を指しており、こうした事実は両者が同一の構造を共有しているという「個人を超えた」水準において理解されねばならないという。

先取して述べておくと、これらはアレクサンダーに対する批判に他ならない。アレクサンダーは、精神分析の他者理解が「常識」に基づく方法を洗練させたものであり、他者理解は観察する者と観察される者とのあいだの同一化による類似に基づいて可能になると指摘していた⁶⁰。ゆえに、言語や思考の水準での「個人差」が大きくなるほど、同一化は困難になる。このことは「相手の言語を理解しないままに、相手の心の状況を理解しようとする」⁶¹場合に、最も顕著であるとされる。こうした事情ゆえに、精神分析は神経症者が用いる原始的で前言語的な象徴的表現を、常識心理学で扱われる言語化された思考へと「翻訳」する方法を必要とした、とアレクサンダー

は述べていた。

一方で、レヴィ＝ストロースの仕事に触れたラカンにとって、人間関係における対称性、あるいは相互性/互酬性 *réciprocité* は、人間の精神や行動を規定する基本構造であるが、同一化という心的機制へと還元することはもはやできない。むしろ、相互性の原理は、自然から文化への移行を印づける近親姦の禁止に由来する個人を超えたものであり、個人差によって無効化されるようなものではない。

ラカンによれば、精神分析の経験はピアジェによる「構造の誤った対象化/客観化」とは正反対の方法、すなわち「主体に独自な関心の水準におけるなじみの弁証法」⁶²によって明らかにされる⁶³。そして、この弁証法においては、「言語に組み込まれた意味作用という唯一の力が、主体が知らぬうちにその振る舞いをつくりあげ、その有機的機能までも調整することが明らかになるイメージを動かす」⁶⁴という。ここには、ラカンが後年に述べたように、「分析作業の唯一の素材である主体/患者の経験」⁶⁵は、もっぱら言語に基づいて扱われねばならないという考えがはっきりと示されている。

3-2. アレクサンダーへの批判

ソシュールへの批判に続いて、ラカンはアレクサンダーの報告を取り上げ、そこでは「フロイト思想の厳密な解説が、ある要因のもとで、その意味を全く逆転させてしまう結果に至っている」⁶⁶と指摘し、その要因として、アレクサンダーが力動的無意識を「前言語的」と形容したことに言及する。ラカンの考えでは、こうした見方は、フロイトが言い間違いや地口といった言語現象を通じて無意識へとアプローチし、さらに、抑圧されたものを既に言語化を被ったものとして捉えていたことと相容れない。無意識を前言語的なものへと還元することは、フロイト理論の核心と真っ向から対立するのである。

続いて、ラカンは、「言葉を持たぬ幼児の段階の体験」を言葉によって再構築しようと試みたクラインの業績⁶⁷に言及しつつ、「我々の技法の成果が正しく評価されるのは、真理という考えの光のもとにおい

てのみである」⁶⁸と主張する。ここで問題となる真理とは、いわゆる対応説における真理、「事物と知性の一致 *adaequatio rei et intellectus*」といったかたちで定義される真理ではない。このような真理観のもとでは、真理は既にどこかに存在しており、やがて発見され、言葉によって指し示されるのを待っているものと考えられている。これに対して、ラカンは「真理はどこにもなく、主体の深層にあるわけでも、何かの袋のなかにあるわけでも、主体の前やあなたの方の前にあるわけでもない。真理は主体が真理を実現するときにある」⁶⁹と述べる。

では、真理はいかにして主体によって実現されるのか。ラカンによれば、真理とは「ディスクリールのひとつの運動」であり、言語を媒介とした「主体の欲望の運動」⁷⁰を通して実現される。すなわち、患者は話すことで、「思考しえない現実を汲み尽くすことはないものの、真理が歴史の高みへと引きあげる過去の混乱を、正しく照らし出すことができる」⁷¹とラカンは指摘している。それゆえに、「主体の救済となるであろう真理を主体に与えること」は、精神分析家の仕事では決してない。真理はそうのように他者から与えられるものではなく、むしろ主体の言葉のうちに生起するものである。

しかし、真理の実現において言葉が媒介となるということは、真理は各々の存在に固有なものである一方で、普遍的な媒介を不可欠な条件としていることを意味する。この点については、ラカンは 1946 年の「心的因果性についての提言」において既に、ヘーゲルにならって、「人間の欲望そのものは媒介となる記号のもとに構成されており、それは自らの欲望を〔他者に〕再認させるという欲望である」⁷²と述べていた。人間は言語と他者という媒介なしには、自らの欲望の対象を持ちえない。そのため、人間の存在そのものをつくりだす弁証法は、「人間の特殊性と普遍性の総合を実現せねばならない」⁷³、すなわち個人に固有の経験や歴史といった特殊性を、言語を媒介として普遍的な次元へと高めていかねばならず、精神分析とはまさにこのような総合の運動を、主体が自らの語りとともに展開していくことを可能にする

場であると考えられた。

この点についてラカンは、「フロイト的治療の精神」は、「主体を普遍的なものへともたらず論理と、主体が自らを疎外する現実とのあいだに主体を置いて、主体の欲望の運動を尊重する」⁷⁴と述べている。だが一方で、「真なるものへの自由な運動のなかで道に迷わないよう保証するものは何もなく、真なるものが狂気へと変わることを確かめるには、ほんのひと押しで十分である」⁷⁵とラカンがかつて指摘していたように、主体が話すことを通じて展開していく弁証法的運動は、あらかじめ描かれた見取図に従って進むものでは決してない。

これに対して、「簡略化された技法」を採用するアレクサンダーにとって、精神分析とは何より自我機能の強化のプロセスであり、そこでは自我が内部・外部の状態を知覚しつつ、緊張状態を調整する力を高めることが目標となる。だが、ラカンにしてみれば、そうした「自我の緊張の均等化」の作業は、標準化された設計図に従って患者の自我機能の不具合を修正し、環境に適合するようチューニングをしていく「エンジニアの仕事」⁷⁶に他ならない⁷⁷。

ラカンは、自我が「人間が現実に適応するための最も変化に富む諸機能の管理者」であることを認めつつも、それを「錯覚の能力」あるいは「嘘の能力」⁷⁸と断じている。なぜなら、鏡像段階論が示すように、自我の原型は、幼児が同胞のイメージへと同一化することによって自らのものとして獲得する身体イメージに他ならないからである。自我は「社会的疎外にかかわりあう上部構造」⁷⁹、すなわち自己疎外のうえに成立している。そして、自己疎外と同一化の繰り返しの中で自我は生成され、人間は自分自身を実際にそうであるものとは別のものと思ひ込む。その限りにおいて、人間の自己認識とは、「狂気の本質をなす無視/誤認 *méconnaissance*」⁸⁰に基づいており、こう言ってよければ、人間は他ならぬ自我の構造において引き裂かれているのだ。ここから、自我の本質的な機能を「現実の体系的な無視」⁸¹と極めて近いものとみなす主張まではほんの一步である。

ラカンはこのように、「イメージナールな形式の心的

な諸効果」⁸²、イマーゴが有機体に与える効果について論じていたが、アレクサンダーに対するコメントでは以下のように、さらに一步進んで、「象徴体系 la symbolique」が生理的領域に及ぼす影響について言及している⁸³。すなわち、「その射程が個体を超えている」生物学的欲求とは、「象徴体系における組み合わせへと、同様に〈法〉の規定へとあらかじめ運命づけられた領野」⁸⁴であると述べている。ここには、レヴィ＝ストロースの「象徴的効果」⁸⁵の反響を見取することができるだろう。

さらに、ラカンは欲望のみならず、人間のあらゆる振る舞いは記号や他者という媒介を抜きにして考えることはできないという立場から、アレクサンダーがセクシュアリティを「あらゆる過剰な心理的緊張の放出の特有の形式」⁸⁶へと還元している点を批判する。アレクサンダーにとって、以下の引用が示すように、性に関するあらゆる行為は緊張の高まりによって生じる不快を解消するための手段に過ぎない。「官能的な意味合いをもつあらゆる現象に共通する顕著な特徴は、過剰な興奮の放出である。この興奮の性質は、愛、憎しみ、好奇心、苦痛、虚栄など、実際には人間の感情の全ての領域を含みうる。性的行為は、その性質のいかにかわからず、あらゆる種類の過剰な興奮を放出する」⁸⁷。こうした主張に対してラカンは、フロイトが既に幼児の排泄や露出症的行為のうちに愛の問題が関与していることを明らかにしていたことを指摘しつつ、アレクサンダーにおいては性機能が「生物学的には排泄の余剰として、心理学的には自我の効力の限界に位置づけられる自我から生じる痒みとして定義される」⁸⁸と批判している⁸⁹。

4. 精神分析の新潮流のなかのラカン

以上、当時の精神分析の進展をめぐる議論と、それに対するラカンの応答を概観してきた。ラカンの主張は、おおよそ二つの軸、すなわち一方では鏡像段階論、他方では精神分析が言語を媒介とした弁証法のプロセスであるとする視座に基づいて展開されている。1946年の「心的因果性についての提言」において既に、ラカンは同一化がもたらす想像的様

式の心的諸効果に注目しつつも、同時にそのリミット、すなわち「シニフィカシオンの諸限界」⁹⁰にも関心を向け始めていた⁹¹。そして、こうした方向への思索に決定的な後押しを与えたのが、レヴィ＝ストロースの仕事であったと考えられる。

ラカンはソシュールの報告に対する発言のなかで、レヴィ＝ストロースの「アルカイックをめぐる錯覚」に言及した直後に、精神分析の経験を理解するためには、同一化と並んで、ローマン・ヤコブソンやニコライ・トルベツコイによる音韻論研究における音素 *phonème* の概念を参照する必要があることを指摘していた。というのも、こうした研究は「心理学が言語を説明する以上に、言語が心理学を規定する」⁹²という事実を明らかにするからである。

トルベツコイは音韻論研究において、音素を言語体系内で弁別的機能をもつ最小の単位として定義した。ヤコブソンはこの考えを発展させ、音素間の対立を構成する弁別特徴の体系を明らかにした。こうして、音素の対立の体系が語の識別を可能にし、そうした差異の関係が言語における意味の差異化を可能にする形式的基盤をなしているという考えが導き出された。

レヴィ＝ストロースは音韻論研究から、諸要素が差異の関係からなる体系のなかでのみ意味を持つという原理を取り出し、親族関係の分析へと応用した。そして、近親姦の禁止を基軸とする女性の交換の制度を、差異と関係の体系によって組織化された社会・文化を規定する無意識の構造として捉えた。ラカンはこのようなアプローチに、意識的主体の彼岸にある無意識の構造を捉える可能性を見て取ったと考えられる。彼はやがて、レヴィ＝ストロースの仕事をフロイトによる無意識の発見の系譜へと位置づけるに至るが⁹³、1950年前後の時期はまさに、その着想が芽生えた時期であった。

この点について付言しておく、ソシュールもまた報告のなかで、自身に捧げられたレヴィ＝ストロースの論文に言及していたが、彼の読みはラカンのそれとは極めて対照的である。ソシュールは、夢とその連想の取り扱いが治療において果たす重要性を強調

する際に「象徴的效果」を参照している。しかし、「象徴は患者の意識的人格が回避しがちである生理的あるいは心理のプロセスへと注意を向けさせることを可能にする」⁹⁴と述べるにとどまり、レヴィ＝ストロースの議論の核心——象徴的效果を個人の心理的作用ではなく、人間の精神や身体を構造化する普遍的な働きである「象徴機能」に由来するものとして位置づけ、象徴機能こそがフロイト的無意識を包摂し、再定義する概念であるという主張——に踏み込んでいない。このように、ソシュールは象徴的效果を従来の精神分析における象徴概念へと還元し、象徴を無意識的願望や抑圧された葛藤など直接的には表現されえないものを、間接的・暗示的に表現するための媒介、すなわち主体が利用する道具として捉えるにとどまり、象徴それ自体が主体を構造化する媒介であるとは考えない。

しかし、このような皮相的な読みは逆説的にも、ラカンがレヴィ＝ストロースの仕事にいつそう真摯に取り組むことを後押ししたとも考えられる。つまり、その構造論的発想を無意識概念の再定義へと接続し、象徴秩序が主体を先行的に規定するという考えのもと、精神分析を心理学とは区別されるべき固有の領域として位置づけようとしたラカンの試みは、ソシュールの読みに対する反論ないしは逆張りとも取れるのである。

なお、1949年の鏡像段階論においてラカンは、私なるものの形成を象徴化する夢という主観的データを取り扱う際に、精神分析の理論的試みが「[主観的データを]言語の一技法によって我々に把握させる経験の条件」から少しでも逸脱するならば、「絶対的主体の思考不可能なものへと自らを投影しているという非難にさらされ続けることだろう」⁹⁵と述べていた。この指摘は、1950年にラカンがソシュールに対して向けた批判——感情という主観的なものにもっぱら注目し、それを言語という媒介を通して探求することを怠った点への批判——と響き合っている。ラカンはさらに、イメージや言語を媒介とした自己形成の条件となる不可視な構造を「象徴的な母体」⁹⁶と呼び、さらに「象徴的還元の方法」⁹⁷によって、自我の

防衛に関する発生的秩序が打ち立てられると指摘している。このように、象徴的なものが自然から文化への移行を可能にし、その後の展開を規定するという発想には既に、レヴィ＝ストロースの影響を強く認めることができる。

ところで、ラカンのソシュールへの反発は、レヴィ＝ストロースの仕事の解釈の相違にとどまらず、ソシュールによる鏡像段階論の根本的な誤読によってさらに強いものとなっていると考えられる。ソシュールは自身の報告において、以下のようにラカンの学説に言及していた。「現実の同化(とりわけ、他者および自己の心理的現実の同化、この達成は外界の同化よりも遅れて行われる)は、適切なものへの適応を可能にし、したがって安全を著しく高める。個人は、ある行為を行う価値があるかどうか、またそれをどのように行うことができるかを見積もることができるようになる。この(現実検討の)能力、すなわち既存の権威に代えて経験そのものを権威とする能力が、個人に必要な自律性を与える。これこそ、投影的で前論理的な思考に対立する、成人の論理的思考の賜物である。この批判的思考 *reflexion* は、投影的かつ反復的なメカニズムを停止させ、記憶の新たな組織化を可能にするものであり、幼児期に始まり、その後に我々の経験をますます多くの領域へと拡張していく。もし私の理解が間違っていなければ、ジャック・ラカンはこの現象の起源を我々の発達のナルシズムの段階に見出し、それを「鏡像段階」と呼んだ」⁹⁸。この引用が示すように、ソシュールはラカンの鏡像段階を、現実検討の能力の発達、すなわち前論理的思考から論理的思考への移行の契機として理解している。しかし、このような読みは、ラカンの鏡像段階論の核心を根本的に取り違えている。

ラカンが鏡像段階論において強調したのは、むしろその逆である。すなわち、鏡像段階におけるイメージへの捕縛こそが、人間の認識をパラノイア的なものとし、自我による無視・誤認の源泉となるのである。ラカンにとって、鏡像段階は単に発達のなかの一段階ではなく、人間が根源的疎外に不可避に陥る契機として位置づけられていた。つまり、鏡像段階論

における自我の概念化は、ラカンが構想する精神分析を自我心理学とは全く異なる方向性へと導くものであり、そうであればこそ、ソシュールのこの誤読はラカンを強く苛立たせた可能性が高い⁹⁹。

5. おわりに——二つの戦後と精神分析

第一回世界精神医学大会が開催された 1950 年は、フロイトの没後 11 年、第二次世界大戦が終結してから 5 年という節目にあたる。ここまで見てきたように、この大会の議論からは、精神分析の新たな展開が期待とともに語られていた時代の雰囲気が見え隠れする。だが実際には、その評価については大西洋を挟んで大きな隔たりが存在していた。

第二次世界大戦の主要参戦国のうち、唯一本土が戦場にならなかったアメリカは、戦時中の軍需生産によって経済が好転し、他の国々が戦災で疲弊するなか世界最大の経済力と生産技術力を持つ国として君臨するようになった。アメリカにおける自我心理学の展開は、こうした経済的・文化的繁栄、科学技術への信頼、進歩への希望、政治や経済における合理性の追求といった社会背景を色濃く反映していた。自我心理学による自我の現実判断の力、合理性や現実への適応の強調はそもそも、ナチズムが象徴した「集団精神病」あるいは「集団妄想」への抵抗であったが、当時のアメリカ社会を特徴づける進歩主義、さらには楽観主義と結びついた結果、精神分析の根本概念である欲動や無意識への関心を後景へと退かせることになった。

ラカン自身も 1950 年の発言のなかで、「いわゆる心理学的なあらゆる科学はこの科学を生み出した社会の諸理想に影響を受けているに違いない、ということを経験が明らかにするという点において、理論は我々の関心を惹く」¹⁰⁰と述べていた。この言葉は、アメリカで発展しつつあった自我心理学が、まさにアメリカ社会の理想を反映したものであることを示唆していると考えられる。

対して、フランスの戦後はアメリカのそれとは大きく異なっていた。ナチス・ドイツによる占領下での国内の分断は深い爪痕を残し、戦後フランス社会の精

神的・文化的風土に大きな影響を与えた。占領、対独協力、レジスタンス、そして解放後の粛清といった一連の経験は、人間の理性に対する素朴な信頼をものはや許さなかっただろう。こうした社会的・歴史的な文脈の差異は、精神分析の進展に対する立場の相違としても明確に表れていた。実際、総会での議論に参加したフランスの分析家たちのあいだでは、アメリカ発の新たな精神分析の潮流に対する警戒感が広く共有されていた¹⁰¹。しかし、その批判の在り方は、理論的見解の相違を含むものでもあったがゆえに、決して一様ではなかった。

他方、戦前のフランスにおける精神分析への抵抗は、大戦での経験によって根底から変化した。エドゥアール・ピションに代表される戦前のショーヴィニスト的態度は、精神分析をユダヤ人の学問とみなし、セクシュアリティの重要性を強調するその理論をパンセクシュアリズムのドグマと断じて、その倫理的退廃を非難し、無意識概念をフランスの知的伝統、すなわちデカルト主義的な合理的意識の支配下に収めようとするものであった。しかし、第二次世界大戦の終結とナチズムの崩壊に伴い、反ユダヤ主義と結びついた精神分析への否定的態度は一掃された¹⁰²。その結果、フランスでは人種的・国家的イデオロギーから解放された新たな知的空間において、精神分析は新たな展開を迎えることとなった。

ラカンが 1953 年に提唱した「フロイトへの回帰」は、まさにこの戦後フランスに形成された社会的・知的環境のなかで初めて可能となった。それは単なる起源への回帰ではなく、戦前のフランス精神分析界では正当に評価されず、さらにアメリカの自我心理学によって葬り去られようとしていた無意識概念を、その根源的異質性において理論の中心へと再び位置づける試みである。ラカンはこの理論的刷新にあたって、当時台頭しつつあった新しい科学、とりわけ言語学や人類学において参照された構造概念をもとに、無意識概念を再定義したのであった。

付記：本研究は JSPS 科研費 JP24K03438 の助成を受けた。

脚注

¹ 大会の準備、とりわけラカンがエーを助けて、クラインの出席を実現させた経緯については、以下を参照のこと。Roudinesco, E. (2009) *Histoire de la psychanalyse en France - Jacques Lacan*. Livre de Poche. pp.1745-1476.

² Alexander, F., Freud, A., Levine, M., de Saussure, R. (1950) *Congrès international de psychiatrie -Paris 1950- V: Psychothérapie-Psychanalyse, Médecine psycho-somatique. Évolution et tendances actuelles de la psychanalyse*. Hermann.

³ 以下の資料には、総会におけるアレクサンダーによる開会の辞、4名の報告の要約、後述するベナシーによる報告、討議に参加した15名のコメント、当日の議論に対するアナ・フロイトを除く3名の報告者の応答、および分科会の記録が収録されている。Ey, H., Marty, P., Boutnier, J., Le Mappian, M. (1952) *Premier congrès mondial de psychiatrie -Paris 1950- V: Psychothérapie-Psychanalyse, Médecine psycho-somatique, comptes rendus des séances*. Hermann.

⁴ この報告は、ベナシーがパリ精神分析協会からの委託を受けて作成したものであった。アナ・フロイトとレヴィンの論文には概ね好意的な意見が寄せられたが、アレクサンダーが提唱した技法の修正については評価が二分しており、ピアジェの発達心理学を取り入れたソシユールの理論に対しては、死の欲動と攻撃性についてのフロイト理論の展開を無視しているとの批判がなされた。Benassy, M. (1952) Rapport des discussions qui ont eu lieu dans divers Pays avant le Congrès. *Premier congrès mondial de psychiatrie -Paris 1950- V: Psychothérapie-Psychanalyse, Médecine psycho-somatique, comptes rendus des séances*. pp.33-54.

⁵ Lacan, J. (1950) Intervention au 1^{er} Congrès mondial de psychiatrie. *Autres écrits*. Seuil. pp.127-130.

⁶ Alexander, F. (1952) Allocution du Directeur de la séance. *Premier congrès mondial de psychiatrie -Paris 1950- V: Psychothérapie-Psychanalyse, Médecine psycho-somatique, comptes rendus des séances*. p.7.

⁷ *ibid.*, p.8.

⁸ Alexander, F. (1950) The evolution and present trends of psychoanalysis. *Congrès international de psychiatrie -Paris 1950- V: Psychothérapie-Psychanalyse, Médecine psycho-somatique. Évolution et tendances actuelles de la Psychanalyse*. pp.1-24.

⁹ *ibid.*, p.5.

¹⁰ *ibid.*, p.8.

¹¹ また、アレクサンダーは、精神分析の方法によって明らかになった無意識の力動性が、心理学的な諸力の本性、すなわちリビド(本能)をめぐる理論とは何ら関係がないと主張していた。とりわけ、1920年以降のフロイトの思索については、それが生命過程における同化 anabolic と異化 katabolic という二つのプロセスを示唆しているが、「生の本能と死の本能の理論は、もはや本能の力を記述しようとする試みではなく、哲学的な抽象となっていたことは明らかである」とさえ述べている。*ibid.*, p.10. こうした態度は、セクシュアリティについてのフロイトの発見の過小評価にもつながるだろう。

¹² *ibid.*, p.22.

¹³ アレクサンダーは、修正情動体験とは本質的には「感情に関する再条件付け emotional reconditioning」に他ならない、と学習理論の語彙を用いて説明している。*ibid.*, p.21. さらに、不安から生じる自我による抑圧のメカニズムも、本質的には「条件付け conditioning」に類似していると述べていた。*ibid.*, p.20.

¹⁴ *ibid.*, p.24.

¹⁵ Freud, A. (1950) The significance of the evolution of psycho-analytic child-psychology. *Congrès international de psychiatrie -Paris 1950- V: Psychothérapie-Psychanalyse, Médecine psycho-somatique. Évolution et tendances actuelles de la Psychanalyse*. pp.29-

36.

¹⁶ *ibid.*, pp.31-34.

¹⁷ この点に関して、アナ・フロイトは自身とクラインのあいだに理論的対立が存在することを明記している。 *ibid.*, p.35.

¹⁸ *ibid.*, p.36.

¹⁹ Levine, M. (1950) Trends in psychoanalysis in America. *Congrès international de psychiatrie -Paris 1950- V: Psychothérapie-Psychanalyse, Médecine psycho-somatique. Évolution et tendances actuelles de la Psychanalyse.* pp.49-85.

²⁰ *ibid.*, p.56.

²¹ *ibid.*, p.61.

²² *ibid.*, pp.63-65.

²³ *ibid.*, p.71.

²⁴ *ibid.*, p.72.

²⁵ *ibidem.*

²⁶ *ibid.*, pp.78-80.

²⁷ *ibid.*, p.74.

²⁸ レヴィンは、アメリカの精神分析運動が、ヨーロッパでの初期の展開のように、深刻な分裂や個人の摩擦といったドラマを軸に展開したわけではないと指摘している。 *ibid.*, p.56.

²⁹ *ibid.*, p.81.

³⁰ de Saussure, R. (1950) Present trends in psychoanalysis. *Congrès international de psychiatrie -Paris 1950- V: Psychothérapie-Psychanalyse, Médecine psycho-somatique. Évolution et tendances actuelles de la Psychanalyse.* pp.95-135.

³¹ *ibid.*, p.98.

³² Odier, C. (1948) *L'Angoisse et la pensée magique: Essai d'analyse psychogénétique appliquée à la phobie et la névrose d'abandon.* Delachaux et Niestlé.

³³ *ibid.*, p.101.

³⁴ この症例は、1949 年 8 月にチューリヒで開催された第 16 回精神分析国際大会での発表においても取り上げられていた。de Saussure, R. (1949) *Réflexions sur la psychodynamique. Revue française de psychanalyse.* 13, pp.391-396. また、ラカンが鏡像段階論を再び発表したのも同大会においてであった。補足しておく、『エクリ』ではラカンの発表は 1949 年 7 月 17 日になされたと記載されているが、1949 年の『フランス精神分析雑誌 *Revue française de psychanalyse*』を参照すると、第 16 回精神分析国際大会は 1949 年 8 月 15 日から 18 日にかけてチューリヒで開催されたと記されている(ちなみに、第 15 回精神分析国際大会は 1938 年 8 月にパリで開催されていた)。RÉUNIONS ET CONGRÈS. *Revue française de psychanalyse*, 13. 1949. p.152. 第 16 回精神分析国際大会については、以下も参照のこと。Roudinesco (2009) *op. cit.*, pp.1746-1747.

³⁵ *ibid.*, p.97.

³⁶ 「同化 assimilation」とはピアジェに由来する概念であり、個体が環境から得られる新たな情報や経験を、認知的枠組みであるスキーマへと取り込む働きを指す。記憶という観点からは、同化は新たな情報を既存の記憶体系へと統合し、そのネットワークを拡張するプロセスとしても理解される。

³⁷ ピアジェに対するレヴィ＝ブリュルの影響については、以下の文献を参照のこと。Jahoda, G. (2000) Piaget and Levy-Bruhl. *History of Psychology.* 3(3), pp.218-238.

³⁸ *ibid.*, p.106.

³⁹ *ibid.*, p.108.

⁴⁰ *ibid.*, p.106.

⁴¹ *ibid.*, p.133.

⁴² *ibid.*, p.122.

⁴³ *ibid.*, p.112.

⁴⁴ *ibid.*, p.119.

⁴⁵ *ibid.*, pp.134-135.

- 46 Lacan (1950) *op. cit.*, p.129.
47 *ibid.*, p.130.
48 *ibid.*, p.127.
49 *ibidem*.
50 *ibidem*.
51 Lacan, J. (1949) Le stade du miroir comme formateur de la fonction du Je telle qu'elle nous est révélée dans l'expérience psychanalytique. *Écrits*. Seuil. p.97.
52 de Saussure (1950) *op. cit.*, p.108.
53 Lacan (1950) *op. cit.*, p.127.
54 *ibidem*.
55 Lacan (1949) *op. cit.*, p.93.
56 Lévi-Strauss, C. (1949) *Les Structures élémentaires de la parenté*. P.U.F.
57 *ibid.*, p.104.
58 もともと、フロイト自身は未開人、現代社会の幼児、神経症者の心の生活に「思考の万能」という共通の原理を認め、それらを大人の思考と区別していた。こうした考えに対して、レヴィ＝ストロースは「アルカイックをめぐる錯覚」において徹底的な批判を行ったのであった。
59 Lacan (1950) *op. cit.*, p.128.
60 Alexander (1950) *op. cit.*, p.5.
61 *ibid.*, p.6.
62 *ibid.*, p.127.
63 ラカンは翌 1951 年の「転移に関する発言」においても、「精神分析経験は、個人の何らかの特性を対象化/客観化するものとして考えられるいかなる心理学にも還元することのできない次元を保持している」と述べている。Lacan, J. (1951) Intervention sur le transfert. *Écrits*. Seuil. p.216.
64 Lacan (1950) *op. cit.*, p.127.
65 Lacan, J. (1966) De nos antécédents. *Écrits*. Seuil. p.71.
66 Lacan (1950) *op. cit.*, p.128.
67 当時のラカンはクラインの仕事に大きな関心を示しており、1948 年 10 月には『児童の精神分析』(1932)のフランス語への翻訳をクラインに申し出ており、同年 11 月に彼女は許諾の旨を返信したとされる。しかし、翌 1949 年 2 月、クラインはラカンに宛てた手紙のなかで、進捗状況の報告はおろか、返信さえしないことに不満を示していた。これに対して、ラカンは弁明の手紙を送り、同年 3 月には再びクラインから翻訳作業を早急に進めるよう催促する手紙が届いている。しかし、この翻訳の計画が実現することはなかった。この翻訳をめぐる経緯については、以下も参照のこと。Roudinesco (2009) *op. cit.*, pp.1748-1749.
また、クラインからラカンに送られた 2 通の手紙については、以下を参照のこと。Lettre de Melanie Klein au Docteur Lacan, 1949. *Lacan Redivivus*. Navarin. 2021. pp.176-183.
68 *ibid.*, p.129.
69 *ibidem*. ここでの真理をめぐるラカンの主張には、ハイデガーの影響が強く認められる。
70 *ibidem*.
71 *ibidem*.
72 Lacan, J. (1946) Propos sur la causalité psychique. *Écrits*. Seuil. p.181.
73 *ibid.* pp.181-182.
74 Lacan (1950) *op. cit.*, p.129.
75 Lacan (1946) *op. cit.*, p.192.
76 Lacan (1950) *op. cit.*, p.129.
77 この点については、レヴィンの報告において、シカゴ・グループの研究に対しては、それが古くからの「汝自身を知れ」という概念ではなく、むしろ「人間工学 human engineering」という概念に基づいているという批判があることが指摘されていた。Levine (1950) *op. cit.*, p.75.
78 *ibidem*.
79 *ibidem*.

- ⁸⁰ Lacan (1946) *op. cit.*, p.171.
- ⁸¹ Lacan, J. (1953) Some reflections on the ego. *International Journal of psychoanalysis*, 34, p.12. この論文のもとになった発表は、1951年5月2日に英国精神分析協会で行われた。
- ⁸² Lacan (1946) *op. cit.*, p.178.
- ⁸³ ラカンはここで *symbolique* の語を女性形で書き、「象徴理論」という一般的な意味で用いている。一方で、1953年以降は、この語を *le symbolique* と男性形で表記し、*le réel* と *l'imaginaire* とともに三つ組をなすものと概念化して晩年に至るまで用いた。
- ⁸⁴ Lacan (1950) *op. cit.*, p.129.
- ⁸⁵ Lévi-Strauss, C. (1949b) L'efficacité symbolique. *Revue de l'histoire des religions*, 135(1), pp.5-27. (Lévi-Strauss, C. (1958) *Anthropologie structurale*. Plon, pp.205-226.に再録)
- ⁸⁶ *ibidem*.
- ⁸⁷ Alexander (1950) *op. cit.*, pp.14-15.
- ⁸⁸ *ibidem*.
- ⁸⁹ ラカンはまた、「フィードバックの力に基づいて、あちこちで組み立てられつつある機械仕掛けの動物」がそのうち「性交への新たな欲求」を示すようになると述べることで、自我を自己調整する機械とみなし、リビードや欲望を無視するアメリカ的発想は近いうちに破綻するであろうと示唆していた。 *ibid.*, p.130.
- ⁹⁰ Lacan (1946) *op. cit.*, p.168.
- ⁹¹ 河野一紀 (2025) 精神医学から精神分析へーラカンの学位論文とともに『エクリ』の第二部を読む, 『I.R.S. ジャック・ラカン研究』, 24, pp.6-30.
- ⁹² Lacan (1950) *op. cit.*, p.128.
- ⁹³ Lacan, J. (1953) Fonction et champ de la parole et du langage en psychanalyse. *Écrits*. Seuil. p.285.
- ⁹⁴ de Saussure (1950) *op. cit.*, p.134.
- ⁹⁵ Lacan (1949) *op. cit.*, p.98.
- ⁹⁶ *ibid.*, p.94. 「象徴的な母体」についてラカンは、「そこにおいて私なるものが原初的なかたちへと——他者への同一化の弁証法において自らを客体化するよりも前、言語によって普遍において自らの主体機能を返し戻されるよりも前に——飛び込むところ」と述べている。
- ⁹⁷ *ibid.*, p.98. ラカンは後年、ひとつの科学の誕生には、「その対象を適切に構成する還元」が不可欠であると述べている。 Lacan, J. (1965) La science et la vérité. *Écrits*. Seuil. p.855. この点に関連して、筆者はかつて、レヴィ＝ストロースの象徴機能という考え方を参照することで、ラカンは精神分析を呪術とは区別される「科学」として形式化するための方法を手に入れたと論じた。河野一紀 (2024) レヴィ＝ストロースの読者、ラカン (Ⅱ) —無意識の科学としての精神分析に向けて, 『追手門学院大学学生相談室年報』, 34, pp.4-22.
- ⁹⁸ de Saussure (1950) *op. cit.*, p.104.
- ⁹⁹ ソシュールはまた、総会での討議を受けて行った応答のなかで、ラカンのコメントに対して個別に反論していた。すなわち、ラカンはソシュールの報告の意図を誤解し、分析を「症候学的理解 *compréhension sémiologique*」へと還元していると批判しているが、彼自身は分析を「幻覚性の感情を同化された感情へと変容させる言語化のプロセス」と捉えており、それはラカンがいう「精神分析的弁証法」と本質的に同一のものであると主張していた。 de Saussure, R. (1952) Réponse des rapporteurs. *Premier congrès mondial de psychiatrie -Paris 1950- V: Psychothérapie-Psychanalyse, Médecine psycho-somatique, comptes rendus des séances*. p.154.
- ¹⁰⁰ Lacan (1950) *op. cit.*, p.130.
- ¹⁰¹ 例えば、ベナシーの報告によれば、サシャ・ナシュトもまた、アレクサンダーが幼児の発達の最初期段階における攻撃欲動 *plussions agressives* の優位を、すなわちクラインの業績を無視していると批判していたという。 Bénassy (1952) *op. cit.*, p.43.
- ¹⁰² Roudinesco (2009) *op. cit.*, p.230.